



## 子どもの「できない」に焦らず付き合おう

幼児教育アドバイザー 大島 みずき

以前伺った幼稚園の園庭で、年中児数人が順番に雲梯に挑戦していました。それぞれ自分が行けるところまで、自分の方法で腕を進め、落ちたらまた列に戻る、を繰り返していました。雲梯の途中で落ちてしまう子、ほとんど進めない子、踏み台を使いながら少しずつ進む子、最後までたどり着ける子とその様子は様々です。子どもたちはなかなか思うように進めず、失敗に落胆しながらも、どうすればもっと進めるかを考えたり、「さっきより進めた」と先生に伝えたり、固くなってきた手のマメを友だちに見せたりしていました。そんな彼らの様子を見てみると、どの子も次は前回より、明日は今日より、きっともっと上手になることに疑問などないように見えました。

もう少し大きくなると「これができた!」「あの子よりも自分はここがすごい!」「テストで何点だった!」と、自分なりの根拠に基づいて自信や自己有能感を持つようになりますが、幼児の場合はそれとは少し違うようです。心理学の研究では幼児が小学生や大学生に比べ、望ましくない特性も将来的には望ましいものに変化すると考えやすいこと<sup>1)</sup>、幼児の有能感の高さに実際の能力の高さが影響しないこと<sup>2)</sup>が示されています。つまり、幼児はできないことはできるようになり、自分にはその力があると理由なく信じているのです。幼児が持つ自分や未来に対する根拠のない自信こそ、出来ないことにも積極的に挑戦できる原動力となります。「できない」を経験し、それでも「できる」ことを信じて挑戦を繰り返す中で「できた」が増えていくのです。ちなみに幼児期の楽天的な思考は、児童期になると「頑張れば、色々できるようになる」へと変化していくそうです<sup>3)</sup>。そのためにも幼児期に素朴な楽天性の中でたくさんの「できない」とその繰り返しからの「できた」の経験を積み重ねる必要があると私は思っています。

子どもが「できない」ばかりだと、大人は「できるようにしてあげたい」と思うものです。しかし、幼児には挑戦し続ける力があります。障壁を取り除き成功の道筋を示すことで彼らの挑戦を終わらせるのではなく、「できない」経験をしているその子自身を支えてあげる方法を考えてみてください。例えば子どもと「できない」悔しさを共有することも彼らの再挑戦の背中を押すこととなります。前述の雲梯場面では、途中で落ちて悔しそうにしている子に、先生が「もう少しだったね」と声をかけ一緒に悔しそうな表情をしていました。その子は先生とのやりとりの後「次こそは」と、走って列に戻って行きました。のちに真の自信につながる根拠のない自信に満ちたこの時期を大切に、子どもの「できない」を焦らずに見守ってほしいなあと思います。

<引用文献><sup>1)</sup>Lockhart, K. L., Chang, B., & Story, T.(2002). Young children's beliefs about the stability of traits: Protective optimism? *Child Development*, 73, 1408-

1430. ◆<sup>2)</sup>中澤潤・泉井みずき・本田陽子(2009). 幼児の有能感の認知と遂行の関連—幼児楽観性の視点から— *千葉大学教育学部研究紀要* 57, 137-143. ◆<sup>3)</sup>中島伸子・

田中優理(2017). 望ましくない特性の変容可能性についての信念の発達：幼児期の素朴楽天主義から児童期の努力依存の楽天主義への移行 *新潟大学教育学部研究紀要* 人文・社会科学編 10, 55-66.

